

生徒指導推進体制の組織と運営の一考察

——学校経営の立場から考察した生徒指導推進体制——

A Study of the Organization and Management for Promoting the Life Guidance System in Schools

From a Viewpoint of School Administration

(1991年4月3日受理)

松 井 朗
Akira Matsui

Key words: 学校経営, 生徒指導, 推進体制

○ は じ め に

学校教育の課題は新教育課程の編成と実施, 教職員の指導力向上, 施設設備の充実改善等といろいろあるが, 中でも生徒指導の問題は年々増加の方向をたどり, 学校経営の立場から見て重要性がますます高まっている。特に問題をもつ児童生徒は, 第3次非行化現象のピークから少し減少したとはいえ, 引き続き変化を伴いつつ多い状態で推移していて, いじめ, 登校拒否, 校内暴力などは社会問題となるとともに, 学校教育への批判要望という形で現れている。最近の例でも, 岡山市の中学校における教師の体罰事件, 福岡市の中学校における生徒の砂埋め事件, そして兵庫県の高等学校の遅刻指導から起こった校門での生徒死亡事件等が発生し大きな問題となった。また, 頭髪, 服装などの規制をどう指導したらよいかの校則問題がマスコミで取り上げられている。以上のような例は, 生徒指導の在り方の問題であると同時に学校経営の在り方にかかわる問題でもある。これらは特別に大きな問題を含んだものであるが, どの学校でも生徒指導の問題は, 大なり小なり絶えず生起し続けており, 豊かな人間形成のための生徒指導の実践が強く求められている。

今日指摘されているように, 家庭や地域社会の教育力の低下は, 家庭や地域で十分に教育を受けないために, いろいろな問題を抱えている児童生徒を増加させる結果となり, 学校での指導上の問題と合わせて多様な様相や行動が現れてくる傾向にある。中途退学, 登校拒否, 喫煙, 校内暴力, 対教師暴力, いじめ, 女子生徒の非行化傾向の増加などがそれであり, 学校の生徒指導の在り方が常に問われている。生徒指導がよく機能しないと学校の具体的実践的な指導が不十分になり, 学校経営の在り方が問われることにもなる。こうした現状を踏まえて, 学校経営の立場から生徒指導推進体制とその運営や活動の在り方を考察してみることにする。

1 学校経営と生徒指導

学校経営の諸条件として考えられるのは, 児童生徒の実態, 教職員組織, 教育指導計画, 施設設備の

管理運用、地域環境・条件等¹⁾がある。学校経営の責任者である校長は、教育目標を達成するために、学校の組織と運営をどのように計画し実施していくかを全体の立場から考えていかなければならない。その視野には常に指導内容や方法といった教育指導の面と人的、物的管理のような行政管理の面とがある。そのうち日々の教育指導のことは本来的な教育の仕事であり、行政管理面は、学校目標達成のための条件整備といってもよい。教育目標の達成をねらった教育指導は、教育課程を中心にして展開されるが、最近では次第に生徒指導の重要性が増してきており、教科指導それ自体も生徒指導の働きなくしては、十分指導の効果があがらない実情である。そうしたことを反映して、校長が人事異動に関して、教育委員会に生徒指導の指導力のある教員が欲しいという要望を熱心に行っている実情がある。以前から生徒指導は、学校教育目標を達成するための重要な機能であり、全教師がそれぞれの役割を分担し、全生徒を対象としていろいろな面から指導しなければならないことになっている。今日の学校教育では、生徒指導の重要性が一層増大してきており、全教職員に生徒指導の理論と実践力が必要とされるところである。飯田芳郎が学校教育の目指す教育的価値の達成のさせ方へ生徒指導がどのようにかわるかにより、いわば「学校教育の本来の使命の達成を左右するほどの重要な意味をもつ²⁾。」といているように、生徒指導の在り方は学校経営上の重要な事柄である。

2 生徒指導の意義

生徒指導の用語は戦後から使用されるようになったのであり、それまでは生活指導や教育指導の用語で教育がなされてきていた。戦後になってわが国にガイダンスの概念を導入したとき、その訳語として教育指導が使われ、昭和24年から文部省が生徒指導を使用した³⁾といわれ、以後、生徒指導と生活指導は同義に使われたり、それぞれ別の意義に使われたりしてきた。わが国の伝統的な用語である生活指導は多様な概念や機能や方法をもって実践されてきた。坂本昇一は、生活指導を学級づくり（生活綴り方の方法を主として取り入れたもの）や学級集団づくりの立場とガイダンス的な立場とから考察し、前二者の立場からのものを生活指導とよぶことが多く、ガイダンス的な立場からのものを生徒指導的生活指導とよんでいる⁴⁾。昭和40年に文部省が「生徒指導の手引」を出して生徒指導の概念や内容を整理して明示して以来、生徒指導が学校では使用されるようになった。その際、機能概念の面が強調された⁵⁾のであるが、機能概念か領域概念かをめぐって論争もあった。しかし、機能概念だけでとらえることはできないで、道徳や特別活動の内容と生徒指導の関係を考えるときに領域概念の考えも認められるようになった⁶⁾。文部省の「生徒指導の手引」に「生徒指導は、人間の尊厳という考え方にに基づき、一人一人の生徒を常に目的自身として扱うことを基本とする。これは、内在的な価値をもった個々の生徒の自己実現を助ける過程であり、人間性の最上の発達を目的とするものである⁷⁾。」とあるように学校教育全体を通して自己指導力の発達を図る教育活動であり、生徒の全人格形成に対する教育活動である。木原孝博は生徒指導を精神的条件整備機能論と人格形成機能論に分けて考察し、人格形成機能論が前者を包み込んでいるとみている⁸⁾ように、生徒指導の中心的機能は人格形成にある。生徒指導の概念や意義は、いろいろと論議が重ねられてきているが、学校では生徒の指導の全分野に係わる重要な教育指導という認識が高まってきている。教師は、学習指導、道徳指導や特別活動の指導をしていても、常に生徒の人間形成を目的意識として指導しており、そのことは同時にあらゆる指導の場合に生徒指導を実施していることになる。そこで、すべての教師に生徒指導の実践力が問われることになる。

3 生徒指導の現状

前述のように生徒指導は生活指導の用語で実践されてきた時代があったが、現在では、昭和40年に文部省が「生徒指導の手引」を出して以来、生徒指導が学校に入ってきて次第に定着してきている。その「生徒指導の手引」では、学校が教育目標を達成するための重要な機能の一つとして、生徒指導の意義を「個別のかつ発達の教育を基盤として、一人一人の生徒の人格の価値を尊重し個性の伸長を図りながら、同時に社会的な資質や行動を高める」ことをねらいとして「生徒の現在の生活に即しながら具体的、実際の活動として進められるべきである⁹⁾。」としている。このように生徒指導は、教育の大切な機能として、また道徳や特別活動に直接的な結び付きをもちながら学校全体をおおう極めて重要な働きをもっている。生徒指導は、教師が生徒理解を深めて個々の生徒をよく把握し、具体的な援助指導を行うことによって、生徒に自己選択、自己決定の力をもたせ、究極的には自己指導の能力を育てる¹⁰⁾ことであるように、一人一人の生徒を個人として、学級集団の一員として、学校全体の指導を通して自己指導力を育成していくものである。生徒指導は望ましい全人的な発達を目指して、学校生活のあらゆる場面を通して生徒一人一人に働きかけると同時に、学級や学校集団の構成員としての生徒に集団の在り方について働きかける教育指導である。

(1) 生徒指導の問題

生徒指導は全生徒にかかわる指導である。時にはごく狭く非行対策のための指導と受け止められることがあるが、それは正しい認識ではない。もっとも、実際には学校では非行問題は大変な現実的な問題でほっておくことはできず、そのことには教師の絶えない指導が必要になってくる。そして非行問題をもつ生徒はどの学校にもいて、その指導は緊急なことになっている。例えば、ごく一部の生徒が行う問題行動が他の多くの生徒を巻き込み、教師の指導を受け入れないで、勝手気ままな行動をして学校全体に大きな影響を与えることもある。そうした場合には、学校ではそのごく一部の生徒の指導に大変力を入れ濃密な指導を続けることになる。問題行動をもつ生徒の指導には生徒指導の大きなエネルギーが注がれることが多い。昭和57～58年頃に学校教育の荒廃がいわれたときに、「あの学校はどうしたのか」と学校外からの批判を受けていたK中学校の例をあげてみる。学校では大部分の生徒は普通の生活をしているのに、一部の生徒が授業拒否をして、勝手気ままにグループで校内を動き回り、喫煙、買い食い、声高な談話をして授業放棄等をして困らせ、教師が注意や指導をすると反抗的な態度をとり、騒ぎをやめないばかりか、かえって調子に乗ってますます騒ぐような状態であった。このような状態では、何よりもこの生徒たちに対して学校内における勝手な動きや遊びを止めさせ、授業に参加させることに指導の重点をおいて生徒指導を進めなければならない。全教師の一致した強力な指導体制が必要で、特別に検討された生徒指導体制が編成され、それによって継続的で強力な生徒指導が続けられ、二年後には平静化した。この時には、岡山市の多くの中学校で似通った傾向がみられ、校長をはじめ生徒指導関係者の苦労や努力は大変なものがあった。このような例は特別な問題を含んだ場合であるが、実際に全国各地で似たようなことが起こり、校舎の破損、対教師暴力、中には教師が生徒を刃物でさす事件が起きたりしてマスコミにも大きく取り上げられ、生徒指導の問題のみならず、学校教育の荒廃とまでいわれたことはまだ記憶に新しいことである。このような生徒指導上の経験をした学校では、強力な推進体制の確立のもとで全教職員の協力した取り組み以外に学校正常化の道はないことを痛感し体験している。生

生徒指導はすべての生徒をよりよい人間や集団に育て発達させていくものであるが、その領域としては、「新生徒指導事典」では個人的適応指導、社会性・道徳性の指導、学業指導、進路指導、健康指導、性に関する指導、安全指導、余暇指導¹¹⁾をあげている。また、澤田慶輔は道徳指導、健康指導、性格・適応指導、学業指導、職業指導、両親との連絡・協力計画、地域社会との連絡・協力計画¹²⁾をあげている。これらは、学校教育の広い分野に及んでいて、しかも重要な内容を含んでいる。このような事柄は、毎日の学校生活において実施している教育指導そのものといえよう。教師は生徒指導の重要性を認識して、それぞれの分担において相互に連携を深めつつ、具体的な生徒指導に努力しなければならない。そのためには、学校における生徒指導推進体制の見直しと新しい視点からの教職員の組織化と活発な活動化を図らなければならない。

(2) 最近の問題傾向

昭和50年ごろから現れてきた第3次非行化現象の波からみて、現在の学校が抱えている生徒指導上の問題は多い。実際には健全に発達している生徒が大部分であるが、中に問題行動をもつ生徒がいれば、その生徒の指導にかかる教師のエネルギーは大変なものがあるし、他の生徒に及ぼす影響も図り知れないものがある。したがって、生徒指導は、非行対策ではなく、全生徒の健全な人間発達がねらいであるといいながら、非行化現象が全体に及ぼす影響の大きさ、またどの学校にも存在する問題であることを考えるとき、非行化現象の動きをとらえておくことは極めて重要なことである。平成元年度の「青少年白書」をみると、非行化現象の傾向としては、万引き、自転車、オートバイ盗、喫煙、服装の乱れ、いじめ、校内暴力、対教師暴力、性非行、女子生徒の非行等が増加していることが指摘されている。また、警察庁の発表によれば、平成2年1月から6月までの刑法犯の少年は前年より減少しているが、全刑法犯中に占める割合は51.4%となっており、少年の場合7割までは万引きとオートバイ・自転車盗であることと、校内暴力は392件で件数、人数とも2割減っていることがわかる。

また、最近増加の方向にあり、社会問題ともなっている登校拒否は、平成2年4月の文部省の発表によると小学校6,285人、中学校36,100人、計42,385人であって、10年前の3.1倍にもなっている。これらの問題は、学校に対して教科指導の充実改善とともに生徒指導の重要性が増し、生徒指導の取り組みが一層求められているといえる。

平成2年8月に倉敷市で生徒指導の研修会が開催された際に、筆者が講義する機会があり、その時、アンケート形式で生徒指導の問題点を聞いたところ次のような意見があった。参加者は、生徒指導担当者で小学校10名、中学校25名、高等学校20名、計55名であった。

この調査では、小学校、中学校、高等学校の生徒指導上の問題が以下のようにあげられている。

小学校では、登校拒否、交通安全指導、校則、家庭との連絡、学業指導、非行、基本的生活習慣等をあげている。登校拒否の中には怠学傾向の児童がおり、その指導が家庭との連絡の面でうまくいかない報告がある。交通安全指導では下校時の指導、自転車の乗り方をあげている。学業指導では基礎基本の指導に力をいれていかなければならないことを指摘している。

中学校では、学業指導、交通安全指導、登校拒否、非行、校則、いじめ、家庭との連絡等をあげている。学業指導では学業不振の生徒の指導、騒がしくなりがちな教科の指導、授業から逃げ出そうとする生徒の指導がある。交通安全指導では交通マナーが守れないこと、二列並進、ヘルメットの不着用、事故への対策をあげている。原因不明や怠学による登校拒否の指導がある。非行問題では喫煙、暴力行為、深夜徘徊、オートバイ盗がある。校則については服装、頭髮に関するものが多く、現在、校則の見直し

生徒指導上の問題について（問「あなたの学校で現在の生徒指導の問題は何ですか」）

項 目	小 学 校	中 学 校	高等学校
学業指導	2	12	10
基本的生活態度の確立	1		
非行	1	8	8
校則（服装、頭髪、遅刻等）	3	6	5
登校拒否（怠学も含める）	5	11	3
いじめ		1	
交通安全指導	4	12	12
校外指導		1	
家庭との連絡	3	1	2
地域との連絡			1
生徒指導体制			1
その他		1	

（注）これは数が少ないが、学校で生徒指導の推進力になっている者の回答であるので、現状を反映しているものと思われる。

を考えている学校もある。その他の項では卒業後高等学校へ進学してから非行化して、中学生に悪影響を与える例があることを指摘している。

高等学校では、交通安全指導、学業指導、非行、校則、登校拒否、家庭や地域の連絡等をあげている。交通安全指導は自転車通学生が多いので、二人乗り、二列並進、傘さし運転があり、バイクのスピード違反等交通マナーに関することが多い。学業指導では授業への主体的参加、生徒の学力差、教科のバラツキ等があること。非行問題では喫煙をはじめとして基本的行動様式が守れない者、万引きや女子非行の増加に指導の力があること。校則では服装、頭髪、遅刻等があげられている。

このような具体的な問題は、岡山県内の限られた学校から聞いたものであるが、県内のどの学校でも、また全国の学校でも共通にみられるものであって、いわば学校における生徒指導上の具体的な問題と受け止めてよいと考えられる。こうした問題と関連して生徒指導推進上の悩みとして、教職員の共通理解、協力体制の必要性をあげているものが何例かあった。

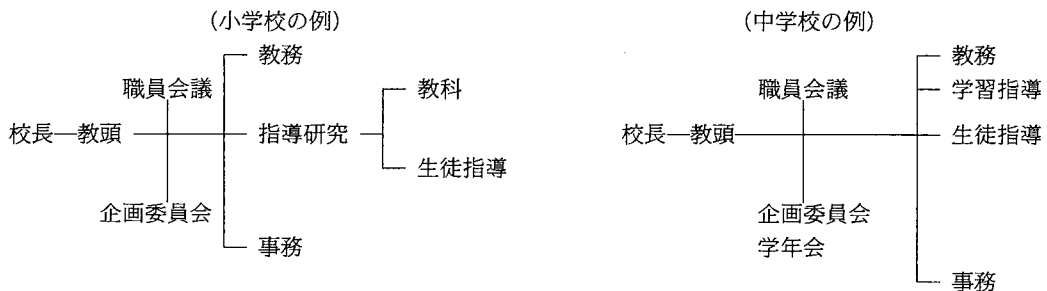
学校教育は、以前は教科指導が中心であって、時に特別な問題抱えた児童生徒がいても、その個別指導をしておれば十分であった。最近は家庭や地域の教育力の低下、地域社会での許容的な雰囲気や急激な社会の変化による影響等により、基本的生活態度が身につけていない児童生徒や自由気ままな生活態度をそのまま学校へ持ち込む児童生徒が増えて、幅広い生徒指導の取り組みが必要になってきている。教科指導をする場合でも、生徒指導を十分にしておかなければ授業が成立しない状態もあり、教科指導と生徒指導とはまさしく一体化したものとなり、ますます生徒指導の重要性と必要性が増大する傾向にある。例えば、授業を始めるのにも遅刻する生徒がいれば、授業を始める前にその生徒を注意しておかなければ授業がうまく進まない。遅刻する生徒は同じ生徒が多く、遅刻する生徒の数も少なくない。また、授業中に私語をする生徒がいて、それを注意しないと私語の輪がますます広がって騒がしく

なっていく。遅刻については、家庭でよく注意をすればなくなることであるにもかかわらずなかなかできない。親に話をすると、「家では注意をしているのですが子供がいうことを聞いてくれないので困っています。」という返事が返ってくる。こうした点からだけ見ても家庭の教育力の不足がうかがえ、何でも学校任せの傾向となっている。このことは一般的に指摘されているが、教師に聞くとやはり家庭での基本的しつけができていない家が増えつつあるようである。学校では基本的生活態度の確立を図りつつ教育をするが、その基本的なものが家庭で固まっていないと初歩のところからやっていくことになる。繰り返し繰り返しこのような指導をし続けることになる。小学校以来、中学校、高等学校と同じことを何回指導しているのであろうか。こうした学習指導以前のことが教師に重くのしかかって、教科指導を始めとして学校生活の中でその対策や指導に追われ振り回されているのが今日の学校の実情であるといえよう。特に中学校や高等学校では、注意をすると生徒の「分かっている。煩い。」というような受け止め方もあって、生徒指導が低次元のところで堂々めぐりをしている状態がある。教師の問題では、教科指導は専門的な学習を積んで教師になっているのであるが、生徒指導については教師の考え方や指導の方法が様々であり、すべての教師が生徒指導の面で指導力が一定のレベルを保っているかどうか疑問である。細かいことには見ても指導の手を出さない者がいたり、言ってみたが生徒が受け付けてくれなかったと指導の力不足を生徒のせいにする者がいたり、その姿勢や力量は様々である。生徒指導担当の者だけが、細かく注意を促してもなかなか効果があがらない。学校全体で同歩調をとって全教職員の同じ考え方、方法、態度をもって指導しなければならない。そこで、学校ではどんな組織で生徒指導体制をつくっているかを考察する。

4 学校経営上の生徒指導推進組織

多くの校長は、校長会等で「生徒指導がよく機能しないと学習指導もうまくいかないし、学校運営もうまくいかないで全体が崩れてしまう」とよく話し合う。生徒指導が十分できている学校では、学習指導、学級経営、生徒活動等が順調に行われ学校経営も計画的、総合的に運営され、学校教育の目標、内容が当初の計画に従って展開されていくことになる。生徒指導に十分力をいれないと学校経営の実があがらないと考え、生徒指導推進体制にはかなり注意が注がれている。生徒指導推進体制の組織は、学校によっていろいろと工夫が加えられているので、学校内に入ってみないと実情は把握できない面があるが、学校校務分掌をみると推進体制の組織がわかる面もある。そこで校務分掌表を調べてみることにする。

岡山市の小学校16校(46校に当たったところ16校が学校要覧に校務分掌表を載せていた)、中学校20校の校務分掌表をみると、次のようになる¹³⁾。一番多かったタイプの例をあげてみる。



小学校では、指導研究部の中で生徒指導が行われているが、中学校では、教務部・学習指導部などと同じように独立した大きな部を構成していて、生徒指導の重要性を示している。

校務分掌の面で生徒指導の担当としてあげてあるものを多い順に並べると、次のようになっている。

小学校

生活指導、町別児童会、校内指導、校外指導、清掃指導、交通安全指導、補導（保導）、教育相談、服装・名札、防災避難、通学班、週番、下校指導

中学校

清掃（美化）指導、生活（生徒）指導、交通指導、教育相談、集合（集会）指導、部活動、保健指導、生徒会活動、拾得物、クラブ活動、防災避難、進路指導、学級指導・学級会活動、広報・掲示、安全指導、同和教育、図書館指導、体育指導、性教育、文化部、補導

これで見ると生徒指導関係の仕事が多岐にわたり、生徒指導の仕事の多様性が現れていることがわかる。極端に言えば、他に所属しないものは何でも生徒指導の仕事にもってきたとも受け止められる。もっと整理しないと生徒指導の仕事が限りなく増えることになるし、生徒指導本来の使命が見失われそうでもある。もっともこの校務分掌は、学校の教職員の数によって構成がかなり異なってくるので、いろいろの条件を考慮しないと簡単には判断できない面もある。生徒指導の組織は各学校に作られており、それによって毎日の活動が展開され、学校運営が特色を見せながら推進されている。この組織は前年度の問題と実際の活動の反省の上に立って、新年度の学校経営の目標の設定とともに作られる。生徒指導部の新メンバーによって新年度の目標と計画が形成されていく。前年度に大きな問題を抱え指導に力がいった場合は十分意見を交わし、議論を尽くして全教職員が納得し、力を合わせて実行できるものにする必要がある。前年度あまり問題もなく順調に運営できた場合にも十分反省することは必要である。特に一人一人の係の仕事について、全職員の協力体制が得られるように工夫することが大切である。

生徒指導部はどんな構成になっているか、また、どのような問題を抱えているかについて、同じ倉敷市での生徒指導の研修会¹⁴⁾で聞いたことは次のようなものである。学校の位置や環境、規模、児童生徒の実態、地域の実態等によって違いはあるが、それぞれの学校の実情はわかる。

(1) 生徒指導部の構成について（問「生徒指導はどのような構成になっていますか」）

小学校

A、校長、教頭、学年から主任又は係、生徒指導主事……4校（この形を基本として以下Aとよぶ）
Aに教務主任が加わる……1校 Aに同和教育主事が加わる……1校 Aに養護教諭が加わる……1校
必要に応じて全員です……2校 全教職員です……1校

中学校

A、校長、教頭、学年から主任又は係、生徒指導主事……12校
Aのうち校長、教頭が加わらない……3校 Aに教務主任が加わる……1校 Aに同和教育主事が加わる……2校 Aに養護教諭が加わる……2校 Aに進路指導主事が加わる……1校 Aに図書館司書が加わる……1校 全教職員です……3校

高等学校

A、校長、教頭、各学年から主任又は係、生徒指導主事……3校
Aのうち校長が加わらない……11校 Aに教務主任が加わる……1校 Aに同和教育主事が加わる……1校 Aに養護教諭が加わる……1校 全教職員です……1校

Aに各科から2名加わる……2校

生徒指導部の構成や推進体制は、Aのような形が多く、学校によってAの形に教務関係や進路指導関係などが加えられ、できるだけ多くの者で構成し全校的取り組みができるような体制にしようとする配慮がみられる。

(2) 生徒指導部の運営上の問題について（問「校内の生徒指導推進体制に関する問題は何ですか」）

小学校

全員の共通理解が得られにくい……2校 指導の一貫性、組織的な指導ができにくい……2校
学校で規制することと家庭に任せることとの区別がつきにくい……1校

中学校

教員の意識の不統一……5校 学年意識が強く、全校の指導との調和が困難……3校 定例会がもちにくい……1校 教員間での指導に差がある……1校 本質論よりも具体的な方法論や指導法へ目が向く……1校

高等学校

共通理解が得られにくい……4校 教員の足並みが揃わない……3校 学年の独自性が強い……1校
指導体制が十分機能しない……1校 集団的な指導力の強化……2校 新採用教員の指導力……1校
教員のオーバーワーク……2校 雑務が多い……1校 時間がとれない……1校
学科（昼間と夜間）との実態の違いと指導体制の違い……1校

これをみると学校種別ごとの問題や悩みがよく表れているように思う。中学校では、教員の意識の不統一、共通理解がむずかしいことがあげられている。学年意識が強く働いて、足並みが揃いにくいことがある。高等学校の場合では、共通理解のことと教職員の一致した指導が行われにくいことがあげられていて、推進体制が十分機能していない、オーバーワークになる、忙しくて時間がない等がある。特に注目したいのは、教師の集団的な指導力の向上の必要性についての指摘である。教師集団の中で一人一人を高め合ってより指導力のある教師集団に変えていくことは生徒指導の充実に大切なことである。

5 生徒指導推進体制の充実改善

生徒指導の推進のための全体的な構想の要点として、文部省の「生徒指導の推進体制に関する諸問題」では、(1)学校の教育目標の達成、(2)全教師の共通理解、(3)学級・学年・学校経営の一貫性、(4)全教師の役割分担の明確化をあげている¹⁵⁾。これらは大切な要点であって、先のアンケートでも学校での大きな悩みの一つとしてあげられているものである。そのうち全教師の共通理解と学級・学年・学校の経営と指導の一貫性について考察する。

今回の教育課程改定の基本方針にある「豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成」や「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」を教育目標にして、生徒指導では教師が一人一人の生徒理解に努めてそれぞれの生徒に対して個別的、発達的な教育を行うことを基本にして実施されるものである。生徒指導は、「究極的には教師の生徒理解に始まり生徒の自己理解に終わる¹⁶⁾。」とも言われるように、一人一人の生徒に教師が働きかけて、個別的なまたは学級や学校集団的な教育によって自己理解の上に立った自己指導力をつけさせるものでなければならない。生徒指導は、全教師が責任をもって協力して果たさなければならない大事な教育機能であり、学級担任を始めとして生徒に直接的に指導

する教師または間接的に接する副担任教師の間に十分な連絡がとれ、学級、学年、学校の目標や方針によって協同的に指導して目的が達成できるものである。ところが、実際の指導に当たっては教師の間で考え方や個性の相違がでたり、指導の方法や態度にもかなりの違いがでてくることが多い。例えば、経験の浅いもの、豊富なもの、積極的な姿勢のもの、冷静に動くもの、情熱的に動くもの、行動力に乏しいもの等様々であり、生徒指導の力量の差がでてくるのが実情である。こうしたさまざまな教師の指導力を一定のレベル以上に保って生徒指導を行うためには、研修会や連絡会を通して細かい情報連絡を交わしたり、指導方法の確認まで含めて十分話し合う必要がある。筆者の考えによればこのような問題点を分析し、指導法を検討するような連絡や研修の会は学年の会を中心に行うのが効果的であると思う。学年会の留意事項をあげてみる。

(1) 学年会を中心にした運営

- ア．生徒に関する最近の正確な情報や資料を交換して意見を十分に述べ合う。
- イ．問題点を明確にして話し合いを進める。司会者は話し合いがあちらこちらに飛び交い散漫になって雰囲気がかわれたり、焦点がぼけることのないように運営をする。
- ウ．お互いに気心の知れ合ったもの同士なので気軽に意見を出し合う。発言力の強いものに片寄りがちになったり、振り回されたりしないで、全員の意見を十分出し合う。
- エ．抽象的でなく具体的に例をあげながら、どのようにしたらよいかを話し合う。経験の浅いもの、指導力の弱いものに配慮して、学年主任や経験の豊かな者は指導助言するような気持ちで発言したり、適当に話し合いをまとめていく。
- オ．話し合いの結果は、簡潔にまとめをして全員で確認し、次の日から指導に生かしていくようにする。
- カ．生徒指導の研修を含む学年会は、週1回、2週間に1回または月に1回程度開き、ゆっくり時間をかけたものを計画する。生徒指導が順調に行われていて問題も見当たらない場合は、簡単にするとか、連絡を中心にするとか弾力的に運営する。
- キ．特に問題行動をもった生徒の場合、個人的な指導を必要とするときには、主任や副担任が同席していた方がよいことが多い。家庭に連絡して親との話し合いが必要なときは、担任一人でない方がよいので、どのような方法で指導するかについて具体的な打ち合わせをする。
- ク．場合によっては、生徒指導研修会のような性格にして学校全体の会にするか、全校に呼び掛けて他学年から自由参加にするかなどして変化をつけ、事例研究や文献内容の紹介等をして指導力の向上に資する。

以上のようにして学年会で話し合われたことのうち重要なものは要点的にまとめ、学校全体の定例の生徒指導部会に報告し、全体の立場から検討を加えられるようにする。

(2) 生徒指導部の運営

学年会を受けた形での生徒指導部での留意することを次にあげておく。

生徒指導部会での留意事項

- ア．各学年から出されたまとめや指導の要点について、他学年の立場や全体的な立場から補足的な情報や意見を出し合って検討する。
- イ．各学年ごとの指導方針や方法を、学校全体で共通理解に努めたり、時には修正したりしながら指導計画にそって実施に移すようにする。

- ウ．この会では学校の指導方針を決める要素も含まれているので、校長や教頭が出席して、それぞれの立場から意見を述べる必要がある。こうした場を通して、校長や教頭の考え方について全校の教師が理解を深め合ったり、校長や教頭はリーダーシップを発揮するようにする。
- エ．この会の司会者は生徒指導主事や教頭など全体の動きをよく把握しているものが当たり、当番制は好ましくない。
- オ．学校によっては、各学年の生徒指導担当者が集まっての連絡会を毎週のように計画、実施しているところもあるが、それは主として生徒の情報連絡や最近の動き、学年の行事実施との関連などについての連絡を中心にして行うようにする。重要な事柄は、学年会や全体会に持ち出すようにする。
- カ．この会でまとまった結果については、各学年に持ち帰って全員に伝えるようにすることが大切である。内容によっては、生徒指導主事から全職員に連絡することが必要なこともある。
- キ．特に必要と思われる事柄は、職員会議にかけたりして全員の意見を聞いてまとめる。

(3) 生徒指導の共通理解と教師の指導力

小学校、中学校、高等学校、いずれの学校においても、小規模の場合を除いて、生徒指導についての共通理解が得られにくいことと緊密な協力体制がとれにくいことが悩みになっている。実際には、教職員の指導観や指導方法の違い、生徒理解の不足、経験の差による指導力の違い、実践力のあるものと消極的なもの、困難な問題に積極的に立ち向かうものとそうでないもの等様々であって、生徒指導に関する指導力は教科の指導力以上に差が大きいのが実情といえる。指導観や指導方法や経験の違いなどを乗り越えて、幅広く全校教師の共通理解を得るにはどうしたらよいだろうか。これは学校の協力体制にとっての大きな課題である。指導観や指導法の違いをもった教師集団をまとめていくには、生徒のためにどうしたらよいかという原点に立つ以外には方法はないといえよう。どの校長も、使命感に燃え、積極性をもち情熱的な態度で生徒に接し、生徒理解に努め、受容性と信頼性に富んだ教師を求めている。様々な教師を抱えながら共通理解と協力体制を作ることに管理職は頭と心を使う。それは、全教師の共通理解のもとに参加と協力、協働の体制を作り上げることに努める¹⁷⁾ためである。実際には先に述べたように、教師の生徒指導に関する指導力の程度は様々であって、その向上と充実が大いに必要とされる。生徒に対する生徒理解とその上に立っての受容力、厳しいが温かい包容力をもった教師の育成が求められている。以前のように、教師は教科指導ができればこと足りるといわれた時代は過ぎ去って、今は生徒指導が極めて大切な仕事になってきているので、生徒指導の理論と実践力を身につけた教師が必要になっている。

生徒指導推進体制の確立は、基本的には全教師の共通理解のもとに参加と協力、協働の体制を作り上げていくことである。ところが実際には、全教師の共通理解を得ることは容易なことではない。そこで完全な共通理解はともかくとしてできるだけ共通理解を深めるために、いろいろと工夫をしなければならぬことになる。その点に関して大切な条件を次にあげてみる。

- ア．生徒指導の全体構想を明確にしておくこと。その全体構想策定については、全教師の参画が得られる機会があること。
- イ．学級、学年、学校経営の一貫性が図られること。
- ウ．個々の教師の分担役割と責任の明確化を図っておくこと。
- エ．学年間の協力体制のもとでの活動や学級担任と副担任の協力的な活動が行われること。
- オ．校長、教頭、学年主任、生徒指導主事等がリーダーシップを発揮すること。

- カ．先輩教師は後輩教師に対して十分な指導をすること。
- キ．生徒指導の重要性を考えた学年や係の構成をすること。
- ク．正確な情報と指導方針の確認等を絶えず行うこと。

以上のようなことが大切であり、具体的な生徒の問題行動を通しての指導の論議と方法の検討をし、確かな指導方針と方法に基づいて実践をしていくことが何よりの意志疎通になる。生徒指導は議論をすることも必要であるが、実践を通して具体的な指導をすることが大切なので、日々の指導を検討しながら自信をもって力強く生徒を指導していかなければならない。

(4) 目標、計画の設定と生徒指導部の活動

学級、学年、学校全体にかかわる活動としての生徒指導のもつ意義は大きく、大切な働きである。その生徒指導に関する全体計画を考えてみる。

学校経営のうえでは、学校教育目標、年度の指導の重点事項や指導計画が設定されるが、この学校教育目標の中に生徒指導の項目はぜひ必要であり、実際には、ほとんどの学校で生徒指導に関することが掲げられている。学校教育目標や指導の重点は生徒指導部で検討して素案を作り、教職員に提案し、職員会議で全員の検討のうえで決定する。目標や指導の重点が設定されると、それに基づいて具体的な学年ごとの指導目標と重点事項が作成されることになる。その際、各学年で作成された素案を生徒指導部で検討修正して、全体の統一を図ってまとめて学年の承認を求めていくような方法がある。

学校全体のものでできるのと合わせて、生徒指導部の今年度の目標、活動計画が作成され、全職員の検討を通して決定される。決定された目標や計画は、生徒指導部が中心となって活動が展開されるが、それぞれの学年運営に委ねられるものもあり、この場合は生徒指導部が学年の指導を助言、援助していくことになる。生徒指導部は生徒指導に関して、それぞれの学年ごとの指導の実際の動きを十分把握しながら他学年や他科・部へ情報を流して連絡を図り、進行状態をもとに問題点の検討を加えてまとめをして毎回の職員会議等へ提案報告する。こうして生徒指導部と各学年、各部、各科との連絡を密にして連携を図りながら生徒指導を進めていけば、教師間の情報連絡や共通理解もでき、具体的な指導の実践も全体との連携のもとで進められることになる。

生徒指導部は、あくまでも全体の調整や正確な情報の提供に努め、実際の指導は、学年団や学級担任や個々の教師に任せる立場をとることが望ましい。どの学校でも悩みになっている全員の共通理解に基づく協働体制づくりについては、生徒指導部が中心になり協力、援助や働きかけをしながら、まとめ役を果たさなければならない。従って生徒指導部には、校長や教頭が加わっている方がよい。また、加わっていない場合には、まず校長、教頭に連絡をとり、意見を聞いてまとめておくことが必要である。このように考えると、生徒指導部の職員構成は、校長、教頭をはじめ各学年の主任か生徒指導係、生徒指導主事は外せられない構成員である。それに加えて教務部の教員、養護教員、進路指導主事も加わった方がよい。学校の規模、職員数等により、それぞれの特色のある構成ができるであろう。

6 生徒指導部の活動

学校の生徒指導を推進するための組織の上で中心となっている生徒指導部は、いろいろな活動をするようになるが、次にその活動の主な例をあげてみる。

- ア 生徒指導上の学校全体の目標、計画の作成について、中心的役割を担い、まとめ役をする。

- イ 生徒指導部独自の年度の目標や活動計画を作成し実施する。
- ウ 各学年の教育課程実施に合わせた生徒指導の実践について、具体的な助言、援助、協力をする。
- エ 突発的な問題や非行問題の発生には、学校内外から正確な情報の把握に努め、全教職員に的確な情報を伝えるとともに、担任教師や学年団教師と協力して指導連絡に当たる。
- オ 全教職員の研究や研修に関して計画を作って実施し、相互に研修する機会を設けて指導力の向上を図る。また、学年別の研修会の計画実施については連絡調整の役をする。
- カ PTAの補導委員会等と連絡をとり健全育成のためのPTA活動を促進し、実施に当たっては協力や助言をする。
- キ 家庭や地域との連携を図るとともに、地域の補導委員会や関係機関との連絡提携に努める。
- ク 学期末や年度末に各学期や1年間の反省をして、問題点を整理してまとめ、次学期、次年度の推進方策について立案する。

7 ま と め

生徒指導推進体制のいくつかの問題について、学校経営の立場から考察をしてきた。生徒指導の重要性と必要性、教師の指導力向上、学校全体の生徒指導力向上のための共通理解と協働指導の在り方等について考察したように多くの問題が抱え込まれている。現在の生徒は、急激な社会変化、核家族化、情報化社会からの影響、許容的社会での生活等からますます問題を背負って学校へやってくるようになるであろう。そして保護者や地域社会は、学校教育に対して今後一層期待を寄せるとともに指導の在り方によっては批判を強めていくことであろう。すべての生徒を発達課題に取り組ませ、それを克服させてより健全な方向に発達させるとともに、問題をもち悩んでいる生徒には温かくしかも厳しい生徒指導の手を差し出して、よりよい人間形成へ向かわせ、ともに助け合い成長し合う学級集団、学年集団そして学校集団へと発展していくような生徒指導の取り組みが必要である。教育課程実施の中での生徒指導の働きは、今後一層重要になるので、生徒指導の実践力を高めるための研究と研修は極めて重要と思われる。生徒指導の研究は、教師間の連絡を十分にとり、学校のもっている具体的な問題に合わせてますます進められる必要がある。

注・参考文献

- 1) 永岡 順 「学校経営」 東信堂 1983年 11頁
- 2) 飯田芳郎他編 「新生徒指導事典」 第一法規出版 1980年 2頁
- 3) 澤田慶輔・高桑康雄 「生活指導」 1985年 学芸図書 7～9頁
- 4) 坂本昇一 「生活指導の理論と方法」 文教出版 1978年 11～16頁
- 5) 文部省 「生徒指導の手引(改訂版)」 大蔵省印刷所 1981年 1頁
- 6) 上寺久雄 「生徒指導」 東信堂 1982年 10～11頁
- 7) 文部省 前掲書 11頁
- 8) 木原孝博 「生徒指導の原理」 光生館 1987年 23～27頁
- 9) 文部省 前掲書 1～4頁

- 10) 松浦伯夫 「生徒指導の原理と内容」(上寺久雄 前掲書) 28頁
- 11) 飯田芳郎他編 前掲書 33～64頁
- 12) 澤田慶輔・高桑康雄 前掲書 26頁
- 13) 岡山市教育センターに保管されている昭和63年から平成元年度の小・中学校の学校要覧に掲載されている校務分掌表を参考にした
- 14) 岡山県教育委員会主催「生徒指導講座」 平成2年8月22日倉敷市で開催されたのに参加
- 15) 文部省 「生徒指導の推進体制の諸問題」(中学校編) 大蔵省印刷所 1975年 2～4頁
- 16) 野々村新 「生徒指導と生徒理解」(仙崎武「生徒指導」) ぎょうせい 1990年 89頁
- 17) 永岡順 「生徒指導のための学校経営」(卯留田敬一「生徒指導のための学校経営」) 明治図書
1982年 110頁